

## 英語の強勢について（その6）

### On English Stress (6)

田 中 章  
Akira TANAKA

---

#### 2.1.7 強勢高揚で説明された語の場合

次に、HVでは従属強勢間の区別を「強勢高揚（Stress Enhancement, = SE）」（HV, p. 242, (38)）を用いて説明した語を扱う。

SEは次のように定式化されている。

(99) (= HV, p. 242, (38))

Stress Enhancement

\*                    line 2  
\* → \* / [(SYL)   line 1

この規則は、語の第一音節あるいは第二音節の強勢を高める働きをする。  
まず次のような語を扱う。

(100) (= HV, p. 243, (40a-c))

- a. Winnìpesáukee      àbràcadábra
- b. àpòtheósis        Mònòngahéla
- c. Tìcònderóga        acàdemícian

最初に (100a) のWinnìpesáukeeであるが、派生は (101) のようになる。

(101) Wìnnìpesáukee

Line 0	Project:L	x	x	x	(x	x	
		L	L	L	H	L	
	Edge:LLL	(x	x	x	(x	x	
		L	L	L	H	L	
	ICC:L	(x	(x	x	(x	x	Avoid (x ( OR
		L	L	L	H	L	
	Head:L	x	x		x		
		(x	(x	x	(x	x	
		L	L	L	H	L	
Line 1	Edge:RRR	x	x		x)		
		(x	(x	x	(x	x	
		L	L	L	H	L	
	Head:R				x		
		x	x		x)		
		(x	(x	x	(x	x	
		L	L	L	H	L	
Line 2	SE	x			x		
		x	x		x)		
		(x	(x	x	(x	x	
		L	L	L	H	L	
	Edge:RRR	x			x)		
		x	x		x)		
		(x	(x	x	(x	x	
		L	L	L	H	L	

Head:R				x
	x			x)
	x	x		x)
	(x	(x	x	(x    x
	L	L	L	H    L

この派生では語末から二番目に重音節があるので、Project:Lが適用される。次に、語頭の音節にもアクセントが付与されるので、Edge:LLLが適用される。さらに、語頭から二番目の音節にもアクセントが付与されるのでICC:Lが適用されるが、その際、回避制約 (Avoid (x ( )) が無視される (overridden)。このようにして生じた3個の構成素の主要部を示すためにHead:Lが適用される。line 1ではline 0で生じた3個の主要部のうち、どれが主強勢を担うかを表示するためにEdge:RRRとHead:Rが適用される。いままでの説明ではこれで正しいアクセントが生成されたとして終わったのであるが、今度はさらに、従属強勢間の強弱関係を示す必要があるので、さらにline 2に進み、まず、SEが適用される。その際、2個の従属強勢のうち、強いアクセントが付与される語頭の音節に星印が付与される。最後に、Edge:RRRとHead:Rが適用されて正しいアクセントが生成される。

上のline 2の派生でEdge:RRR とHead:RをSEの前に適用することも考えられるが、その場合の派生は次のようになる。但し、line 2のみ示す。

## (102) Winnipésaukee

Line 2	Edge:RRR				x)
		x	x		x)
		(x	(x	x	(x    x
		L	L	L	H    L

Head:R				x
				x)
	x	x		x)
	(x	(x	x	(x    x
	L	L	L	H    L

SE					x
	x				x)
	x	x			x)
	(x	(x	x	(x	x
	L	L	L	H	L

この派生の場合、line 2では主要部が一つしかないのでEdge:RRRを適用する意味がはっきりしなくなる。さらに、Head:Rを適用する必要があるのかということになる。加えて、SEとEdge:RRR、Head:Rの関係がはっきりしなくなる。従って、本稿では、SEをEdge:RRRとHead:Rの前に適用する。

ここで問題が生じる。HVは次に、語頭から一番目と二番目の音節のうち、弱い方のアクセントを持つ音節が、枝分かれをしないライムを持つ場合、SDが適用されるとすることである (HV, p. 243 参照)。その場合の (101) のline 2以降の派生を示すと (103) のようになる。

(103) Winnìpesáukee

Line 2	SE				x	
		x			x)	
		x	x		x)	
		(x	(x	x	(x	x
		L	L	L	H	L
	Edge:RRR				x)	
		x			x)	
		x	x		x)	
		(x	(x	x	(x	x
		L	L	L	H	L
	Head:R				x	
		x			x)	
		x	x		x)	
		(x	(x	x	(x	x
		L	L	L	H	L

SD					x
	x				x)
	x				x)
	(x	x	x	(x	x
	L	L	L	H	L

ここでは、語頭から二番目の音節が弱い方のアクセントを持ち、枝分かれしていないライムを持つのでSDが適用されている。そうすると、SEは適用する必要がなかったということになる。このことは、(100)の残りの語についても当てはまるし、HVがp. 243であげている(41a)から(41c)までの語にも当てはまる。ただ、(41d)についてはSEは必要である。そこで(41a)から(41d)までの語を(104)としてあげる。

(104) (= HV, p. 243, (41a-d))

a. pàraphernália	mèmorabília	fòraminífera	Tàtamagóuchi
b. amànuénsis	apòtheósis	Epàminóndas	
c. epìstemólogy	Colùmbiána	Epìscopálian	Atàscadéro
d. icònoclástic	icòsahédron	dègènerátion	Dòdècanésus

そこで、SEを適用しないで、(104)の語を順に扱うことにする。まず、(104a)のpàraphernáliaであるが、派生は(105)のようになる。

(105) pàraphernália

Line 0	Project:L	x	x	x	(x	x	x
		L	L	L	H	L	L
	Edge:LLL	(x	x	x	(x	x	x
		L	L	L	H	L	L
	ICC:L	need not apply					
	Head:L	x			x		
		(x	x	x	(x	x	x
		L	L	L	H	L	L

Line 1	Edge:RRR	x				x)		
		(x	x	x	(x	x	x	
		L	L	L	H	L	L	
	Head:R					x		
		x			x)			
		(x	x	x	(x	x	x	
		L	L	L	H	L	L	

この派生では、語末から三番目の音節が重音節であるのでProject:Lが適用される。次に、語頭の音節にもアクセントが付与されるのでEdge:LLLが適用される。語頭の音節と語末から三番目の音節にしかアクセントが付与されないため、ICC:Lは適用する必要はない。次に、このようにして生じた2個の構成素の主要部を示すため、Head:Lが適用される。line 1では、line 0で生じた2個の主要部のうち、どちらが主強勢を担うかを示すためEdge:RRRとHead:Rが適用されて正しいアクセントが生成される。(104a) のTàtamagóuchiの派生も全く同じになる。

次は(104a) のmèmorabíliaであるが、派生は(106) のようになる。

(106) mèmorabília

Line 0	Project:L	x	x	x	x	x	x	
		L	L	L	L	L	L	
	Edge:LLL	(x	x	x	x	x	x	
		L	L	L	L	L	L	
	ICC:L (t)	(x	x	x	(x	x	x	
		L	L	L	L	L	L	
	Head:L	x			x			
		(x	x	x	(x	x	x	
		L	L	L	L	L	L	
Line 1	Edge:RRR	x				x)		
		(x	x	x	(x	x	x	
		L	L	L	L	L	L	

Head:R					x		
	x				x)		
	(x	x	x	(x	x	x	
	L	L	L	L	L	L	L

この派生では、すべての音節が軽音節であるので、Project:Lは適用されない。次に語頭の音節にアクセントが付与されるので、Edge:LLLが適用される。次に3項的構成素を生じさせるためにICC:L(t)が適用される。このようにして生じた2個の構成素の主要部を示すためにHead:Lが適用される。line 1ではline 0で生じた2個の主要部のうち、どちらが主強勢を担うかを示すためEdge:RRRとHead:Rが適用されて正しいアクセントが生成される。(104a)のfòraminífèraの派生も全く同じになる。

次は(104b)のamànuénsisを扱うが、派生は(107)のようになる。

(107) amànuénsis

Line 0	Project:L	x	x	x	(x	x	(x # Avoided
		L	L	L	H	H	
	Edge:LRL	x	(x	x	(x	x	
		L	L	L	H	H	
	ICC:L	irrelevant					
	Head:L		x		x		
		x	(x	x	(x	x	
		L	L	L	H	H	
Line 1	Edge:RRR		x		x)		
		x	(x	x	(x	x	
		L	L	L	H	H	

Head:R				x		
		x		x)		
	x	(x	x	(x	x	
	L	L	L	H	H	

この派生では、語末から二番目の音節と語末の音節が重音節であるが、回避制約 (Avoid (x #) のため、Project:Lが適用されるのは前者の音節にのみである。次に語頭から二番目の音節にアクセントが付与されるのでEdge:LRLが適用される。ICC:Lはirrelevantである。このようにして生じた2個の構成素の主要部を示すためHead:Lが適用される。line 1ではline 0で生じた2個の主要部のうち、どちらが主強勢を担うかを示すためEdge:RRRとHead:Rが適用されて正しいアクセントが生成される。(104b) のapòtheósis、Epàminóndasの派生も全く同じになる。

次は (104c) のepistemólogyであるが、派生は (108) のようになる。

(108) epistemólogy

Line 0	Project:L	x	(x	x	x	x	x
		L	H	L	L	L	L
	Edge:LRL	vacuous					
	ICC:L (t)	x	(x	x	(x	x	x
		L	H	L	L	L	L
	Head:L		x		x		
		x	(x	x	(x	x	x
		L	H	L	L	L	L
Line 1	Edge:RRR		x		x)		
		x	(x	x	(x	x	x
		L	H	L	L	L	L
	Head:R				x		
			x		x)		
		x	(x	x	(x	x	x
		L	H	L	L	L	L



この派生では、語頭から二番目の音節が重音節であるのでProject:Lが適用される。Edge:LRLは空虚に (vacuously) 適用される。次に語末から三番目の音節にもアクセントが付与されるのでICC:L(t) が適用される。このようにして生じた2個の構成素の主要部を示すためHead:Lが適用される。line 1ではline 0で生じた2個の主要部のうち、どちらが主強勢を担うかを示すためEdge:RRRとHead:Rが適用されて正しいアクセントが生成される。この派生で注意すべき事が一つある。それは、line 0でICC:L(t)の代わりにICC:Rを適用する派生方法も可能であるということである。その場合は、ICC:L(t)とHead:Lの組み合わせの方がICC:RとHead:Lの組み合わせより「等質的」であるとするしかない(「等質的」については(その1)の(15)の説明参照)。本稿では前者を採用することにする。

次は、(104c)のColùmbiánaを扱うが、派生は(109)のようになる。

## (109) Colùmbiána

Line 0	Project:L	x	(x	x	x	x
		L	H	L	L	L
	Edge:LRL	vacuous				
	ICC:L	x	(x	x	(x	x
		L	H	L	L	L
	Head:L		x		x	
		x	(x	x	(x	x
		L	H	L	L	L
Line 1	Edge:RRR		x		x)	
		x	(x	x	(x	x
		L	H	L	L	L
	Head:R				x	
			x		x)	
		x	(x	x	(x	x
		L	H	L	L	L

この派生では、語頭から二番目の音節が重音節であるのでProject:Lが適用される。Edge:LRLは

空虚に適用される。次に語末から二番目の音節にもアクセントが付与されるのでICC:Lが適用される。このようにして生じた2個の構成素の主要部を示すためHead:Lが適用される。line 1ではline 0で生じた2個の主要部のうち、どちらが主強勢を担うかを示すためEdge:RRRとHead:Rが適用されて正しいアクセントが生成される。

次は (104c) のEpiscopálianであるが、派生は (110) のようになる。

(110) Episcopálian

Line 0	Project:L	x	(x	x	(x	x	x	(x # Avoided
		L	H	L	H	L	H	
	Edge:LRL	vacuous						
	ICC:L (t)	vacuous						
	Head:L		x		x			
		x	(x	x	(x	x	x	
		L	H	L	H	L	H	
Line 1	Edge:RRR		x		x)			
		x	(x	x	(x	x	x	
		L	H	L	H	L	H	
	Head:R				x			
			x		x)			
		x	(x	x	(x	x	x	
		L	H	L	H	L	H	

この派生では、語頭から二番目の音節、語頭から四番目および語末の音節が重音節であるが、回避制約 (Avoid (x #)) のため語末の音節を除いてProject:Lが適用される。Edge:LRLとICC:L(t) は空虚に (vacuously) 適用される。このようにして生じた2個の構成素の主要部を示すためHead:Lが適用される。line 1ではline 0で生じた2個の主要部のうち、どちらが主強勢を担うかを示すためEdge:RRRとHead:Rが適用されて正しいアクセントが生成される。次は (104c) のAtàscadéroであるが、派生は (104c) のColùmbiánaの派生 (109) と全く同じになる。

次は (104d) のicònoclásticに向かうが、派生は (111) のようになる。

(111) icònoclástic

Line 0	Project:L	(x	x	x	(x	x	(x # Avoided	
		H	L	L	H	H		
	Edge:LLL	vacuous						
	ICC:L	(x	(x	x	(x	x	Avoid (x ( OR	
		H	L	L	H	H		
	Head:L	x	x		x			
		(x	(x	x	(x	x		
		H	L	L	H	H		
Line 1	Edge:RRR	x	x		x)			
		(x	(x	x	(x	x		
		H	L	L	H	H		
	Head:R				x			
		x	x		x)			
		(x	(x	x	(x	x		
		H	L	L	H	H		
Line 2	SE	x			x			
		x	x		x)			
		(x	(x	x	(x	x		
		H	L	L	H	H		
	Edge:RRR	x			x)			
		x	x		x)			
		(x	(x	x	(x	x		
		H	L	L	H	H		

Head:R				x	
	x			x)	
	x	x		x)	
	(x	(x	x	(x	x
	H	L	L	H	H

この派生では、語頭の音節、語末から二番目および語末の音節が重音節であるが、回避制約 (Avoid (x #) のため語末の音節を除いてProject:Lが適用される。Edge:LLLは空虚に (vacuously) 適用される。次に語頭から二番目の音節にもアクセントが付与されるのでICC:Lが適用されるが、その際、回避制約 (Avoid(x( ) は無視される (overridden)。このようにして生じた3個の構成素の主要部を示すためHead:Lが適用される。line 1ではline 0で生じた3個の主要部のうち、どれが主強勢を担うかを示すためEdge:RRRとHead:Rが適用される。さらに、従属強勢を持つ語頭の音節と語頭から二番目の音節の間で強勢の程度を区別するため、line 2でSEが適用され、最後にEdge:RRRとHead:Rが適用されて正しいアクセントが生成される。語頭から二番目の音節の持つ従属強勢の方が強い場合も、全く同じように、この音節にSEが適用されて説明できる。

次は、(104d) のicòsahédronであるが、派生は (112) のようになる。

(112) icòsahédron

Line 0	Project:L	(x	(x	x	(x	x	(x #Avoided
		H	H	L	H	H	Avoid (x (OR
	Edge:LLL	vacuous					
	ICC:L	vacuous					
	Head:L	x	x		x		
		(x	(x	x	(x	x	
		H	H	L	H	H	
Line 1	Edge:RRR	x	x		x)		
		(x	(x	x	(x	x	
		H	H	L	H	H	

	Head:R						x
		x	x				x)
		(x	(x	x	(x	x	
		H	H	L	H	H	
Line 2	SE	x					x
		x	x				x)
		(x	(x	x	(x	x	
		H	H	L	H	H	
	Edge:RRR	x					x)
		x	x				x)
		(x	(x	x	(x	x	
		H	H	L	H	H	
	Head:R						x
		x					x)
		x	x				x)
		(x	(x	x	(x	x	
		H	H	L	H	H	

この派生では、語頭の音節、語頭から二番目の音節、語末から二番目および語末の音節が重音節であるが、回避制約 (Avoid (x #) のため語末の音節を除いてProject:Lが適用される。その際、回避制約 (Avoid (x () は無視される (overridden)。Edge:LLLとICC:Lは空虚に (vacuously) 適用される。このようにして生じた3個の構成素の主要部を示すためHead:Lが適用される。line 1ではline 0で生じた3個の主要部のうち、どれが主強勢を担うかを示すためEdge:RRRとHead:Rが適用される。さらに、従属強勢を持つ語頭の音節と語頭から二番目の音節の間で強勢の程度を区別するため、line 2でSEが適用され、最後にEdge:RRRとHead:Rが適用されて正しいアクセントが生成される。語頭から二番目の音節の持つ従属強勢の方が強い場合も、全く同じように、この音節にSEが適用されて説明できる。

(104d) の *dégénération* の派生は *Winnipésaukee* の派生 (101) と全く同じである。(104d) の *Dòdècanésus* の派生は *icònoclástic* の派生 (111) と全く同じになる。(その7へ)

---

**(参考文献) (追加)**

- (その1) 新潟経営大学紀要 第14号 2008年3月 37頁～53頁  
(その2) 新潟経営大学紀要 第15号 2009年3月 15頁～29頁  
(その3) 新潟経営大学紀要 第16号 2010年3月 13頁～25頁  
(その4) 新潟経営大学紀要 第17号 2011年3月 9頁～21頁  
(その5) 新潟経営大学紀要 第18号 2012年3月 1頁～15頁